

アリス・プレザンス・リデル

生い立ちと生涯

笠井 勝子

『不思議の国のアリス』にヒロインとして永遠に名をとどめるアリスは、作者キャロルに誘いかけておとなでも十分に楽しめることば遊びの数々を引き出した。聞き手の3人の子供たちの中でなぜかアリスが名をとどめたのは、当時10才の彼女の強いはたらきかけのせいであった。「わたしのことを書いた本があったら、すてきだわ」そう考えたアリスが、ボート遊びやピクニックで一緒に出かけてくれるドジスン先生（ルイス・キャロル）に、楽しかったお話を書いてください、と頼んだのである。

この利発で元気のいいアリス、実在したアリスについて2人のイギリス女性の手になる優れた研究書がある。メイヴィス・バイティの『オクスフォードのアリス』（1979）と、アン・クラーク・エイマーの『実在のアリス』（1981）である。以下この2人の研究から実在のアリスの生い立ちと生涯を紹介したい。

アリスは1852年5月4日にロンドンのウェストミンスター・パブリックスクール校長の家に生まれた。アリス・プレザンス・リデルという名前でウェストミンスター寺院において父の手によって洗礼を受けた。プレザンスは母方の姓である。父ヘンリ・ジョージ・リデルは有名なギリシャ語辞典を完成した人であった。（当時は古典語としてギリシャ語、ラテン語を学ぶことが重視された時代であったが、ギリシャ語を直接英語で理解するための辞書はなかったので、この辞書の完成には多大の意義があった。「リデル=スコットのギリシャ語辞典」と呼ばれているよう

に、1834年にロバート・スコットと一緒にとりかかった仕事であったが、1840年にスコットがコーンウォールの大学に職を得てからはリデルは独力で完成にこぎつけた。1843年の出版以来リデルは亡くなる前年の1897年まで8回の改訂を続けている。「よい部分はリデルの仕事、下手なところはスコットだ」と書かれたほどであった。

リデルはヴィクトリア女王の夫君アルバート殿下の宗教相談役でもあった。報酬のない一種の名誉職だが、形だけに終わらないで相談に乗ってほしいという意向であった。アリスが生まれる前に母のリデル夫人は危篤に陥った時期がある。原因は腸チフスで、それも学内で発生した患者の看護にあたっているうちにリデル夫人自ら感染してしまったのだ。生涯の友人としてまた医者としてリデル家を見守り続けたヘンリ・アクランドの懸命な手当と、リデル夫人の健気な意志で危機を越えることができたが、さもないとアリスはこの世に生まれることができなかったかもしれない。

父方の叔父にチャールズ・リデルがいる。彼はリデル夫人のチフスの一件をきっかけに、ロンドンの給水ルートを調べ44ページにわたるレポートをまとめ上げた。彼の調査の結果、ロンドンへ供給する水の取水口はテムズ川では首都の下水の排水部にあることがわかった。

リデル夫人は聡明で美しく優しいのみならず、夫の地位相応に周囲からの尊敬を受けるべく家柄を保つことを常に心得て、絶えず向上心を持ち、すべての点で上流階級の夫人であった。生徒たちへの配慮、学校行事を側面から応援し、使用人の監督、若い教師たちの相談相手、世間話には興味がない夫に代わってパーティを盛り上げることなど、まことに頼もしいヴィクトリア朝の伴侶であった。身だしなみにも十分に気を配っていたことは、リデル家の子供達の写真を見るとわかる。アリスたち姉妹はいつもその折々の洗練された流行の服装をしている。

リデル夫妻には男4人と女6人の子供があった。上の5人の子供たち

はウェストミンスター校在任中に生まれている。ただ、アリスのすぐ上のジェイムズ・アーサー・チャールズは3才にならないうちに猩紅熱のために亡くなった。

アーサーの死もあってウェストミンスター校に見極めをつけていたリデルはもっと有望な地位を求めていた。1855年6月、彼のもとには女王の承認を得てオクスフォードのクライスト・チャーチ学寮の学寮長に任命するという知らせが届いた。リデルが44才の時であった。彼はその頃学問的にレベルの落ちていたクライスト・チャーチを立て直すためにさまざまな改革を遂行した。そのためにチャールズ・ドジスンには容赦のない改革者と批判されている。しかしクライスト・チャーチの学問的レベル向上に果たしたリデルの功績は大きく、1870年には学寮長のまま、大学の副総長の任命を受け実質的に最高責任者となる。その時の総長はソールズベリ卿であった。

1855年6月2日に亡くなった前任者ゲイズフォード学寮長は保守的な聖職者で、現状を変革することは彼を支持する者たちの思いもよらないことであった。僧院のごとく静かに、空気は止まっていたのであった。学寮に住む教官たちは聖職の資格を取ることと、独身が条件になっていた。リデルとしては、学寮長館は当時の社会において尊敬を受ける身分に相応しい住居であるとともに大学において学者や芸術家の交流する社交の場でもあった。彼は1546年枢機卿ウルジーが建てた学寮長館の内装に手を入れた。『ギリシャ語辞典』の収益で改修した階段には、アリスたちが『辞典階段』と名前を付けた。

1856年アリスは両親と兄のハリー、姉のロリーナ、妹のイーディスと共に大学の教授たち、学者や聖職者、芸術家が交流するオクスフォードの真只中で暮らすことになった。その時アリスは4才であった。当時彼らの身分の者は、男の子は早ければ6、7才から寄宿学校の生活に入り、女の子の教育は住み込みの家庭教師に任された。リデル家に雇われて子

供たちの躰と初歩の勉強をみたのはメアリ・プリケットである。彼女の父ジェイムズ・プリケットはトリニティ・コレッジの食堂主任を務めていた。学寮長館に住んでいると、小さな子供達が走り廻って遊ぶことは周囲の事情で許されない。お天気のいい日は午後になると家庭教師に連れられて、必ず散歩に出かけて元気なエネルギーを発散させてきた。ビンジーにあるトゥリークル・ウェルもそうした散歩先の一つである。その井戸にはオクスフォードの守護聖人フライズワイドの伝説が残っていた。サクソンの姫君だった聖女は小舟でテムズ川を下りオクスフォードにたどりつき、修道院をつくる。ビンジーには彼女の祈りに応えて病をいやす水が湧きだし、中世には巡礼が集まってきた。

ロリーナ、アリス、イーデイスの三人がチャールズ・ドジスンに出会ったのはオクスフォードに越してきた年、1856年の4月25日の午後のことである。いつものように前庭で遊んでいると、カメラ道具一式を抱えて二人の青年が現れた。クライスト・チャーチの大聖堂の写真を撮りにきたドジスンと友だちのレジナルド・サウジーであった。ドジスは5フィート10インチ、細身で姿勢が真っすぐであったため実際より高く見えた。ぎこちないくらい真っすぐな姿勢を、子供たちは火掻き棒を飲み込んだようだと形容している。子供たちは好奇心旺盛で傍に寄っていき、子供の好きなドジスンとたちまちともだちになってしまう。のちに「金色の夏の午後」として永遠の記憶に残るボート遊びやピクニックは、それから6年後のことになる。

1856年6月5日ドジスンと従兄のフランクはハリーとロリーナを連れてボートでピクニックに出掛けている。この年のクリスマスにドジスンはハリーに機械仕掛けの亀を、ロリーナにはウェセロールの『ラザフォード夫人の子供たち』という本を贈った。アリスが5才の誕生日の翌日にドジスンは贈り物を持って訪ねている。

リデル家では子供達が小さい間は両親とは別に子供だけで夕食をさせ

ていたが、少し大きくなってくると食後の音楽会や室内ゲームの仲間入りをゆるされた。リデルは家の者たちが大学内外のできごとに正しい理解と関心を持つことを求めているから、アリスたちきょうだいは早い時期からアカデミックな話題に馴染んで成長していった。「子供はお客様に見ていただく者であって、口を利く者ではない」というのがヴィクトリア朝の通念であったことを考えると、学寮長館の子供たちは特別恵まれていた。アリスたちは早い時期からオクスフォードの大学教授はほとんど顔馴染みになっていた。『不思議の国』で帽子屋が歌う、「きらきら光る小さいこうもり」という「きらきら星」の替え歌は、バーソロミュー・プライス教授を歌ったものだ。教授は仲間の間では通称バット（こうもり）で通っていた。それというのもこの天体観測が趣味の数学者にはみんなの頭上高く舞い上がって遠大な理論を展開する癖があったためである。

オクスフォードを散歩するといつも新しい発見がある。それにリデル学寮長の子供というだけで、大学内のどこを見せてもらうにも可愛いお客様扱いで、喜んで便宜をはかってもらえる。リデルは大学出版局の長を務めるほかに、ボドリン図書館の館長、大学博物館、美術館の館長、大学予算委員会の委員長でもあった。そしてリデル夫人のパーティには著名なお客が集まることで評判だった。

新しい家族がふえていくにつれてアリスたちは少しずつブリケットさんの監督から離れ、新しい先生にみてもらう。フランス語、ドイツ語、イタリア語、そして絵の先生はジョン・ラスキンである。『不思議の国』には週1回捻って、伸ばして、失神するのを教えにきた『年寄りのあなご』がそれである。ラスキンがアリスに送った手紙を見ると、年配の者からの親しいからかいが散りばめられている。そうした手紙からは、成長したアリスの中に依然『不思議の国』のアリスが生きていて、形式ばったものにとらわれない柔軟な頭の持ち主であったことがわかる。

1858年リデル一家はアクランド家と共に北ウェールズのランディドゥノッで、一夏を過ごした。遠浅の海とごつごつの岩山グレイト・オームズヘッドはひとけもなく荒涼とした自然のままの姿であった。アクランドの家族と一緒に散歩したり、植物採集をしたり、写生をしたりして休暇を過ごしたリデルはやがてこの土地に別荘ペンモーファを建て（1862年に完成）春と夏の休暇を過ごすためにやってくる。1861年のクリスマスにドジスはロリーナ、アリス、イーデイスの3人にキャサリン・シンクレアの本『ホリディ・ハウス』を贈った。リデルの別荘ペンモーファのことが念頭にあったからで、本のはじめには3人の子供の名前をつかったアクロスティックの詩を書いた。中に出てくるホリデイとハウスの語は太い字で書いてある。ペンモーファには著名なお客も滞在した。グラッドストーンが高所恐怖症とわかったのは一家と一緒に岩山に上った時のことである。崖縁の隘路に出た時グラッドストーンは一步も動けなくなってしまう。子供達が崖際を一行に防護壁となって進み、リデルの腕に掴まってやっとの思いで下りてきた。画家リッチモンドは一ヵ月程の滞在の間にロリーナ、アリス、イーデイスの「三姉妹」の絵を描きあげた。しかし、この場所にも保養地として人々が集まってくるようになると、リデルは別の所を探す。そこはワイト島のイースト・シーンであった。

ワイト島に新しい休暇先を見つけたリデル家はそこで女流写真家として知られるキャメロン夫人に出会う。キャメロン夫人は当時の有名人を数多く写真に撮っている。その中にはトゥロロップ、ブラウニング、ホルマン・ハント、ダーウィン、ハーシェル、テニスンなどもいた。ドジスはキャメロン夫人のわざと焦点をぼかした写し方を好まない。キャメロン夫人はリデル家の人々、特に20才前後のアリスの美しい写真を残している。

ところでアリスの父方の祖母シャロット・ライアンは十八世紀のトマ

ス・ライアンの子孫にあたり、このトマス・ライアンの長男が結婚後ライアン=ボウズ家を創り、4代目のクロード・ジョージ・ボウズ=ライアン（姓の順序は入れ替わっている）の娘エリザベス・アンジェラ・マーガレット・ボウズ=ライアンが女王エリザベス2世の母、エリザベス皇太后であるから、アリスはちょうど生まれる百年前の代でエリザベス2世と血縁になる。

1859年ヴィクトリア女王とアルバート殿下の意向で皇太子がクライスト・チャーチに入学することが決まった。ヘンリ5世以来のできごとに学寮はこぞって歓迎し、たいへんな名誉と考えた。特別車両で到着の皇太子をリデル学寮長はホームに出迎え、市長や市の長老や大学関係者の紹介をした。クライスト・チャーチの全教職員学生は中庭に勢揃いして出迎え、皇太子の学寮到着と同時に歓迎の鐘が鳴り渡った。翌年12月にはヴィクトリア女王自らクライスト・チャーチを訪問され、学寮長館で歓迎のパーティが催された。その席で、ドジスは初めて皇太子に紹介され、自筆コレクションのアルバムに署名を頼んでいる。

1862年学寮長館にはビリケンとダイナーという2匹の猫が飼われていた。ビリケンはハリーの、ダイナーはロリーナのペットであったが、前者は食中毒で死に、ダイナーはアリスが可愛がる余りロリーナから彼女のペットに移り、やがて『不思議の国』へその名前が登場することになる。

オクスフォードに引っ越して間もなくアリスは兄ハリーの小馬のトミーで乗馬の練習を始めている。リデル家の御者のバルチチュードが手ほどきをした。

外で遊べない日にはロリーナ、アリス、イーディスの三人は学寮長館の裏口から、乳母に付き添われてオールド・ライブラリの中にあるドジスの部屋に遊びにいった。大きなソファにドジスを囲むように座った子供達に彼はお話をし、スケッチを描いて見せる。お話はまったく新

しいこともあれば、以前の話が少しずつ変わって、しまいには、まったく別の話になることもあった。儀礼的な大人の付き合いでは吃る癖があったドジスンも子供たちの中ではまったく自然でその心配はない。子供たちがすっかり満足すると、トランクの中に集めた珍しい衣装を取り出して、彼らの夢を誘った。ドジスンが撮った子供の写真の中にはさまざまなポーズで、またさまざまな衣装の姿がある。アリスには乞食のなりをして写っている写真まである。こうしたことにも幼いアリスの好奇心や冒険心をみることができよう。

夏がくると川面の涼を求めてボートでピクニックに行った。大学のガウンを白いフラノのズボンと麦藁の帽子に取り替えると、チキンやサラダやビスケットが入ったバスケットと、お茶のための薬缶を下げてドジスンとロビンスン・ダックワスはボート屋へ向かう。3人の子供たちは喜びにスキップしながら彼らのまわりを飛びはねていく。ニューナムには知り合いのウィリアム・ハーコート家がピクニックにくる人たちのために見晴らしのいい場所に小屋をいくつか用意していた。火曜日と木曜日にはお皿やフォークを借りてそこで食事ができた。歩き廻った後は乾草山の日陰に座って、お湯を沸かし、お茶を入れる。こうしたボート遊びのピクニックには、ダックワスのほかクライスト・チャーチ在学中のいとこのスケフィントン、弟のウィルフレッド、あるいはサッジーかハーコートのだれかひとり誘って行った。なかでも子供たちに人気があったのは、歌のうまいダックワスであった。

アリスがもうすぐ11才になる1863年3月10日、初めて公の場で役目を果たすことになった。この日はクライスト・チャーチ出身の皇太子の結婚の当日で、オクスフォードのブロード・ウォークにはリデル三姉妹が記念に三本の植樹をすることになった。大勢の見物人が見守る中で3人の子供たちは自分の植えた木にアルバート、ヴィクトリア、アレグザンドラと名前を付けて、最後にそれぞれ「この木が、今日の良き日からい

つまでも末永く栄え、生い茂りますように」と結んだ。

1863年4月に新しい弟が生まれた。皇太子の名前をいただいてアルバート・エドワード・アーサーと名付けられ、洗礼式は皇太子夫妻が学寮長館を訪問される時に合わせて、代父として立ち合っていただくことが決まっていた。しかしアーサーは5月28日にわずか8週間の生命で亡くなった。6月の大学創立記念祭にオクスフォードを訪れた皇太子夫妻は学寮長館に宿泊され、皇太子には名誉学位が授与された。また皇太子妃からは大学の志願兵たちに記念品が贈られた。バザーではアリスたちの出店に立ち寄ってロリーナが売っていた白い猫を買っている。夕方開かれたクローケーのゲームにはアリスたちも一緒に参加した。

アリスの文学的才能は彼女が幅広くものを読んで、多くの知識人、文筆家たちと交流の機会に恵まれていたことを考えると、驚くほどに平凡である。もちろん、作法にかなった優雅な文体で手紙を書き、語法に誤りは無いのであるが、それだけのことでひらめきや輝きは認められない。ところが音楽や、絵画、木彫りには並はずれた才能を有していた。当時オクスフォードにはジョン・ステイナーとチャールズ・ヒューバート・パリーの2人の音楽家がいた。ステイナーはクライスト・チャーチの大聖堂で初めてマタイ受難曲を演奏した人である。集まった1200人の聴衆の中にはこの開催に力を貸したりデル学寮長と家族の姿もあった。ドジスは礼拝の場所を宗教音楽とはいえ音楽会場に使用することには反対していた。ステイナーは1861年に大学のオルガン奏者になっている。一方パリーはイートン在学中にすでに音楽で学位をとっていた。彼はリデル姉妹のために女声三重唱のための作品を贈っている。

アリスに絵画の個人指導をしたのは、ジョン・ラスキンで、彼はアリスにターナーの作品を、姉と妹以外の人には見せないという条件付きで貸し与え、それらを模写するように指示している。当時ラスキンの美術

評論家としての評判は高く、オクスフォードに美術教授として就任の講義には学生ばかりか麗装の婦人まで押し掛けて、テイラー研究所の満員の講義室からアクランドの機転で会場を急遽シェルドニアン講堂に移したほどであった。木彫りの方は妹のローダの腕前も優れていた。彼女はサイドボードや衝立て、テーブルといった大きな作品を仕上げた。結婚する友達のために製作したローダの作品を見てラファエル前派のトマス・ヴィア・ペインはこんなお祝いが貰えるのなら結婚する価値はある、といったほどであった。彼は生涯結婚をしなかったが、ローダは彼に木彫を贈っている。アリスの作品は現在オクスフォードの聖フライズワイズ教会で見ることができる。それはサクソンの姫君だった聖女が小舟にのってテムズ川をオクスフォードにたどり着いた時の姿を彫ったものである。クライスト・チャーチではロンドンの貧しい地区に宣教団を派遣していたが、そのポプラー地区に教会を建設することになり財政的援助をリデル自ら働きかけた。1890年7月15日完成した聖フライズワイド教会へアリスは木彫りにした聖女フライズワイドのパネルを贈った。それは教会のドアにはめこまれていたが、ロンドンの空襲で奇跡的に爆撃を免れて後、現在は再びオクスフォードの聖フライズワイズ教会に戻っている。

1872年レオポルド・ジョージ・ダンカン・アルバート王子がクライスト・チャーチに入学した。アリスより一ヵ月前の1853年4月7日生まれであった。学寮長館でのパーティや音楽会でリデル姉妹と親しくなり、やがてアリスとの間に愛が芽生える。リデル家はこれをひた隠しにした。女王の信頼を裏切るとリデル夫妻は考えたからだ。女王にすれば王子の配偶者は当然王室からと望んでいた。レオポルドはあまり体が丈夫でなく、兄弟の末っ子であり、皇太子には後継ぎも生まれていたの、王位継承の可能性は少なく2人にとって望みがありそうに見えた時期もあった。

1874年2月4日アリスの姉ロリーナはクライスト・チャーチの大聖堂でウィリアム・ベイリー・スキーンと結婚した。ロリーナは結婚後は夫の邸宅のあるスコットランドのファイフで暮らすことになる。スキーンは相続した多くの土地を管理しながら羊の放牧で暮らしていたが、元々学問を好む人で、クライスト・チャーチの財務担当官となり、オクスフォードとスコットランドを行き来しながら亡くなるまでその職にあった。

1876年レオポルドはクライスト・チャーチでの勉学を終えロンドンに戻った。6月16日創立記念祭の行事に出席のためオクスフォードを訪れる。この時彼の行く先々にはアリスも一緒であった。もちろん必ず母か妹が同行していた。6月18日教会で日曜日の礼拝の最中、妹のイーディスは身体の不調をうったえ家へ戻った。イーディスはこの記念祭の時にオーブリー・ハーコートとの婚約を発表することになっていた。ヴィクトリア女王からは発表がないことを問い合わせる電報が届く。しかしイーディスは記念祭の間ずっと横になっていた。はじめは麻疹と思っていたのが、一週間後の日曜日にアクランドが呼ばれた時には虫垂炎から腹膜炎を起こし、当時としては手の施しようがなく、ただ痛みをなるべく抑えて死を待つだけだった。九月に結婚を控えて幸せのさなかにイーディスは21才で世を去った。あまりに突然の悲しみであった。6月23日にはロンドンへ戻っていたレオポルドは金曜日の葬儀に駆け付けてアクランドと共に柩の先頭を担いだのである。柩の後には花婿となるはずであったオーブリー・ハーコートが続いた。彼は生涯を独身で通す。アリス、ローダ、ヴァイオレットの姉妹は純白の衣裳で続いた。大聖堂の中の聖ミカエル礼拝堂にはイーディスを記念して、バーン・ジョーンズが作成した聖カタリーナのステンド・グラスが取り付けられている。

アリスがレオポルドのことを諦めるまでに4年が経過した。1880年の7月7日にアリスはレジナルド・ハーグリーブスと婚約した。彼はクリ

ケットに熱心なスポーツマンで、礼儀正しい、人好きのする、親切な青年であったが、ラテン語、ギリシャ語、フランス語など語学は苦手で学問を好む人ではない。学士号をとるまでにふつうより2年長くかかっている。知的レベルにおいてはとてもアリスの相手ではなかった。しかし彼はアリスとの婚約をこの上ない幸運と喜んだ。

1880年9月15日ウェストミンスター寺院でアリスの結婚式が行われた日、オクスフォードでは式の時間に合わせてクライスト・チャーチの大聖堂の鐘は1時間鳴り通した。

アリスへの結婚のお祝いの目録は全部で137点記録されている。その中にはプリンス・レオポルドから贈られた真珠の馬蹄形のブローチがある。レオポルドからの祝福であった。アリスはウェディングドレスの胸にこれを留めた。しかしロリーナの結婚式ではリデルの伯母に腕をかし列に加わり、イーディスの棺を先頭に立って担いだレオポルドの姿は式場にはなかった。彼はその時、遠くスコットランドでハイランドの伝統競技の集いに出席していた。アリスが嫁ぐ姿を見るに忍びなかったであろう。ドジスの贈り物は目録にはないが、クライスト・チャーチの中庭を描いたスピアロのオリジナル水彩画を友人のトマス・ヴィア・ペインと一緒に贈った。

アリスの夫レジナルドの妹エンマはこの2年前1878年にロバート・ヘンダースンと結婚し、庭園造りに専念して、セッジウィックパークを造り上げている。アリスとレジナルドはそこでハネムーンを始め、スコットランドを廻って、スペインへ旅行した。

レジナルド・ハーグリーブズ夫人となったアリスはハンプシャにあるカフネルズと呼ばれるハーグリーブズ家の邸宅で暮らすことになる。ここにはかつてジョージ3世とシャーロット王妃が宿泊された「黄金の間」とよばれた部屋がそのまま残っていた。カフネルズ荘の使用人には序列があり食事、執事、料理頭、家政婦頭は、家政婦の部屋ですが、女

中頭、下女中 2 人、調理場女中 2 人、皿洗い女中、洗濯女中、御者 2 人、小間使い、小間使い兼家政婦たちは召使の食事部屋です。ほかに外回りの仕事をする馬丁、御者、庭師らがいた。アリスは母を見て身につけたとおりこれらの者たちをしっかりと監督した。

アリスが生涯尊敬した父は学問の世界の人であり、またレオポルドも学者プリンスと言われるくらいに学問に関心の深い人であった。しかし、アリスが結婚相手に選んだ人は学問よりも、スポーツに関心が強かった。知的なレベルで共有できない部分があったとしても、アリスはそれを愛情のこもったからかいの気持で眺めていた。レジナルドは教養の点においても育ちの点においてもアリスに崇拜の気持を抱いていた。社交上のリーダーシップは、つねに陰ではアリスがとっていた。かれらの結婚は誠に具合のいい幸せなものであった。2 人の間には 3 人の男の子が生まれる。

アリスに長男が生まれた年、レオポルドはオルバニー侯爵となり、ヘレン・フリデリカ・オーガスタと婚約、結婚式はウインザー城のセント・ジョージ礼拝堂で行われ、アリスとロリーナに出席の誘いがあった。

1883 年 1 月 8 日アリスに 2 番目の男の子が生まれる。同じ年の 2 月 25 日にはレオポルドに初めて女の子が生まれた。アリスは早速お祝いを述べるとともに、自分の息子の代父になってくれるように頼む。レオポルドは喜んで引き受けるとともに、その名前を問い合わせている。そして自分の最初の子にアリスと名付けることを知らせている。このプリンセス・アリスは 1981 年に 97 才で亡くなるまで献身的な生涯を送っている。アリスの 2 番目の子供はレオポルト・レジナルドと名付けられた。

1884 年すなわちアリスと名付けられた王女の生まれた翌年、寒さを避けてひとりでカンヌに滞在中の 3 月 28 日、レオポルドは脳内出血のため急死した。32 才の若さであった。身重だったヘレン・フリデリカはレオポルドの死後、7 月 19 日に男の子を出産した。

アリスにとって別離の後のレオポルドの死は、いいようのない悲しみを残した。もちろん夫と3人の子供のいる幸せな家庭に恵まれて何一つ不足はなかったが、夫の中に知的に対等の相手を見いだせないという点で、アリスの孤独感は消えることがなかった。

アリスに生まれた3人の男の子のうち上のアランは父親似のスポーツマンで人付き合いのいい青年であった。中のレックスは兄に比べれば母方の血を引いていた。しかし内省的で文学や芸術に親しんだのは末のキャリルであった。彼は1887年11月19日にカフネルズ荘で生まれた。その名前はキャロルから取ったのか、という間にアリスは物語の中からだ、とだけ答えている。アリスの上の息子2人は戦死する。とくに2番目のレックスの場合、塹壕の中で腰まで泥水に浸かって長時間にわたる忍耐の末に勝利を収めて引き返す途中で、味方の後方支援部隊から敵と誤って銃撃を受けてのことであった。なんとも悲惨な結末であった。

1926年2月14日アリスの夫レジナルドは73才で亡くなった。晩年は耳が聞こえにくくなったレジナルドは父親の代からずっと続けてきた治安判事の席も不本意ながら辞めなければならなかった。この年は寒さが厳しく、カフネルズ荘の辺り一帯深い雪に覆われた。交通は途絶え、野性の馬は青草を求めて柔らかい雪を鼻で掻く姿があった。その景色を写生しながら、アリスは一人の時間を過ごす。根強い階級意識は周囲の者たちに親しむことを許さないものであった。カフネルズ荘を相続したのはアリスではなく息子のキャリルであった。勿論アリスがこの家を出ていかなければならないようなことはなく、キャリルはそのままロンドンで暮らした。アリスの母は1910年6月25日85才で亡くなっていた。母の死で法的にはアリスに8,000ポンドが入ることになっていたが、そのようなものを当てにすることになるとは思いもかけず、アリスは自らその権利を放棄していた。夫を亡くした今、使用人も多く広い屋敷を維持していく費用をアリスは息子に頼らなければならなくなった。こうしてドジス

ンがアリスに贈った手稿本は競売に掛けられることになったのである。

オークションは1928年5月4日ロンドンのニューボンド・ストリート
のサザビーでおこなわれた。アリスも壇上に姿を見せた。1時きっかり
に始まった競りにはドクタージョンソンの最後の手紙やバイロンの決闘
用のピストルなども出品されていた。ドジسنの手書きの本の競りは
5000ポンドから始まり、毎秒百ポンドのペースで競り上がっていった。
場内は見守る人々の興奮で競る声も聞き取れないほどであった。激しい
やりとりの末、結局アメリカ人の書籍ディーラー、ローゼンバック氏に
15400ポンドで競り落とされた。手稿本はアメリカ人の手にわたったの
である。

ひとりぼっちで大きなカフネルズ荘に住むアリスは昔母に襲けられた通
り召使には家事万端をきちんとさせていた。1928年には15才のメアリ・
ゲイラーという新しいメイドが雇われた。彼女は週給3シリング6ペン
スを貰っていた。カフネルズ荘の朝は、5時50分には仕事が始まる。最
上階から順次錠戸を全部開け、次に暖炉の掃除、それからリネン類の繕
い、というのがメアリの仕事であった。アリスは思いがけない時に召使
の所に現れる。或る朝しもやけのために、鉄の金具が動かせず錠戸はそ
のままにして暖炉の掃除を始めたメアリの傍らに、何時の間にかご主人
のアリスが立っていた。自分の言い付けを守らないことを厳しく非難し、
女中頭を呼びつけ錠戸を代わりの者に開けさせる。そうしてしもやけの
軟膏を取り寄せさせるのであるが、その代金はもちろん給料から差し引
いてあった。メアリの給金の1週間分であった。

1930年の10月に姉のロリーナはスコットランドのストラミグロで亡く
なった。妹のヴァイオレットとロードは結婚しないままであったが、ヴァ
イオレットの方はアリスが夫を亡くした翌1927年亡くなった。息子キャ
リルはアリスの反対を押して1929年6月6日戦争未亡人で二人の息子を
もつマドラインと結婚している。この頃からアリスはカフネルズの冬の

寒さを避け、なによりも妹ローダの家に1マイルと離れていないので、ウェスタラムの「ブリーチズ」という16世紀にできた大きな家を借りて冬を過ごすようになる。

1932年、コロンビア大学はルイス・キャロル生誕百年を記念して、アリスに名誉博士号を贈呈することになった。式は80才というアリスの高齢に配慮して1月27日のキャロルの誕生日ではなく渡米を4月まで遅らせることになった。息子のキャリルと妹ローダに付き添われて4月29日にアリスはアメリカに着いた。コロンビア大学では3月31日から百年祭記念の作品展が開かれ、ドジスンの手稿本、1865年版（挿し絵のできあがり不良として回収された版）が9冊、1866年版（刷り直した初版）11冊などが展示された。5月2日午後の授与式においてアリスは名誉文学博士号を贈られた。大学のガウンと帽子をつけたアリスは、生まれてから結婚するまでずっと慣れ親しんできた雰囲気の中に再び戻ってきたのである。懐かしい感動が蘇ってきたにちがいない。誇らかに写真におさまっているアリスの姿はとても80才の婦人には見えない。事実、式の間中アリスは手に持った杖に頼ることもなく、周囲の勧めを受けつけないうで立ち続けていた。円形の式場はさながら花園のようで、アリスのために花で飾りつけられた特別席が用意されていた。ところが何かの間違いで学長がそこに腰を下ろしてしまった。しかしだれもみなそ知らぬ顔で黙っていた。みんなはきっと『不思議の国』の憲法第42条を心得ていたのにちがいない——とフローレンス・ベッカー・レノン面白がっている。

それから2年後の1934年11月の初め、車で出かけた途中気分が悪くなったアリスはすぐに自宅にもどり、医師が呼ばれた。しかしそれきり昏睡状態に陥ったまま11月15日にブリーチーズで息子のキャリルと妹ローダに見守られてこの世を去った。アリス・プレザンス・ハーグリーブス、82才の生涯であった。

参考書目

Amor, Anne Clark : *The Real Alice*, Michael Joseph (1981)

————— : *Lewis Carroll, A Biography*, J. M. Dent (1979)

Batey Mavis : *Alice's Adventures in Oxford*, Pitkin Pictorials (1979)

Bowman, Isa : *Lewis Carroll as I Knew Him*, Constable (1972)

Cohen, Morton N. : *The Letters of Lewis Carroll*, Macmillan (1979)

Gardner, Martin ed. : *The Annotated Alice*, Penguin (1970)

Green, Roger Lancelyn ed. : *The Diaries of Lewis Carroll*, Greenwood
Press (1970)

Lennon, Florence Becker : *The Life of Lewis Carroll*, Constable (1972)